様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月９日現在

機関番号：34319
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19520117
研究課題名（和文）
日本１９世紀版画史の再構築
研究課題名（英文）
A Study of Japanese Woodblock Prints in 19th Century
研究代表者
菅原　真弓（SUGAWARA MAYUMI）
京都造形芸術大学・芸術学部・准教授
研究者番号：10449556

研究成果の概要（和文）：
本研究では、日本の 19 世紀における版画の歴史を再構築することを目指した。結果としては、幕末から明治における版画媒体、特に木版画（浮世絵版画）の諸作品、諸作家についての成果を挙げる事ができた。またこれらと同時期にやはり行われた版画技術である石版画や銅版画と、木版画との研究についても、そのテーマの共通性についてなど、明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
In this study, I aimed to reconstruct the history of 19th century Japanese prints. As a result, the media prints in Edo and Meiji, in particular woodblock prints of various works, was able to deliver exceptional results for various artists. Lithograph and etching and engraving technology, these were also the same time also for research and woodblock prints, and about the common theme was found.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 19 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
平成 20 年度	700,000	210,000	910,000
平成 21 年度	500,000	150,000	650,000
平成 22 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：美学・美術史
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：美術史、日本、版画、浮世絵、１９世紀

１．研究開始当初の背景

本研究は、１９世紀の日本の版画史をテーマとした。しかし研究開始当初においては、以下の通りの状況であった。

（１）まず日本の版画史における時代区分としての「１９世紀」が、まず設定されていなかった。

（２）また当該時期の版画研究においても、１８５０年代までの木版画(浮世絵版画)研究が、作家の個人研究を中心に行われ、一方ではおおむね１８６８年以降の石版画、写真の研究が個々に行われており、表現に表れた技法間の影響関係について触れた研究は存在していなかった。

（３）さらに当該時期の木版画研究に限って述べたとしても、葛飾北斎、歌川広重、歌川国芳といった一部の作家は注目されているが、それ以降（主として１８６０年代以降）

の作家たちについては、全くと言ってよいほど研究が進んでいないのが現状であった。

研究開始当初における研究の動向について、以下は具体的に述べる。

従来の日本版画研究では、これを通史として、あるいは各時代の版画史としてとらえる試みは少なく、多くは技法(木版画、銅版画など)ごと、そして時代を区切った発展史として語られてきた。唯一、日本版画史の総体として刊行されたのは、梅原龍三郎監修『日本版画美術全集』(全八巻、１９６０～６２年、講談社)である。また版画の技法という観点から、日本の版画のみならず、絵画作品の複製技術として発展した西洋版画の流れをも概観した町田市立国際版画美術館編『版画の技法と表現』(１９８７年、町田市立国際版画美術館)は、研究蓄積の少ないこの分野では貴重な研究と言えるだろう。１９世紀以降の版画に着目した研究としては、主に展覧会開催という形で行われてきた。近年では『版画・８０年の軌跡』展図録(１９９６年、町田市立国際版画美術館)、『描かれた明治ニッポン～石版画〔リトグラフ〕の時代～』展図録(神戸市立博物館他、２００２年、神戸市立博物館)などがあり、そのいずれもが１８６８年(明治維新)以降の木版画、銅版画、石版画などを精力的にとりあげて展観したものである。こうした展覧会の開催や、展覧会での研究成果をまとめた青木茂監修『近代日本版画の諸相』(１９９８年、中央公論美術出版)が刊行されるなど、これまで等閑視されてきた近代の版画研究は、徐々にその厚みを加えつつある。しかしこうした研究はいずれもその起点を１８６８年(一部は米国艦隊が来航した１８５３年)に置いたものであり、本研究が設定する時期すべてを網羅するものとは言えない。一方、１９世紀半ばまでの版画についての研究は、個々の作家研究、作品研究にとどまっている。さらに１８６０年以降については、作品数が飛躍的に増大するにもかかわらず、数少ない作家研究、作品研究が行われているに過ぎない。

自らが、本研究に至った経緯について述べる。私はこれまで一貫して幕末から明治初期の美術作品と作家を、いわゆる近代とはどの時期を起点とするのか、というテーマのもと研究してきた。旧論「月岡芳年歴史画考」(『美術史』１４１冊、１９９６年)では、従来、１８９０年代後半以降に芽生え始めるとされてきた歴史画の萌芽を、１８９２年に亡くなったこの作家の作品群に認めることが出来る事を確認した。また「『前賢故実』の波紋」(練馬区立美術館編『菊池容斎と明治の美術』展図録、１９９９年)では、１８６８年に刊行された菊池容斎著の版本『前賢故実』が、すでに１８９０年代後半以降の歴史画の原型を備えており、かつこれが先に挙げた月岡芳年を通じて、明治後の木版画作家たちに受け継がれ、さらには日本美術院の画家達が描く歴史画とも一脈を通じている事を明らかにした。また２０００年に美術館勤務となって以降は、１９世紀初頭から半ばにかけて活躍した葛飾北斎や歌川広重、歌川国芳といった作家の研究を通じて、主として銅版画の技法に学んだ西洋画法や外来染料の導入によって得られた作品が数多くあることを確認、単に木版画の発達史のみでは語れない、版画史としての視点の重要さを認識した。併せて従来、１８６８年を分岐点としていた１９世紀の日本版画研究であるが、技術における、また表現における連続性に着目する事が必要であると確認できた。旧論「「名所」の変貌―小林清親「日本名勝図会」をめぐって」(菅原真弓編『名所の変貌』展図録、２００３年、中山道広重美術館)では、独学で木版画を学んだこの作家に、歌川広重作品の強い影響が見て取れる事、またさらに２０世紀の日本の版画においても、同様に歌川広重作品の影響が見られる事を明らかにした。そしてそれが、単なる前時代の懐古的な営みではなく、表現の主体的継承と言うべきものであることを確認した。わたしは当時、主として木版画について研究を進めてきたが、本研究ではこれを踏まえた上で、１９世紀の版画全体に視野を広げ、かつ複製技術という観点からも版画をとらえることとした。

２．研究の目的

１９世紀日本における版画、および広い意味での複製芸術制作の実態を、作品に即して検討し、従来、１８６８年の明治維新を以って分断されていた日本版画史の１９世紀像を再構築することを、まず最も大きな目的とした。

日本における１９世紀の版画は、木版画はもとより、１８世紀後半に将来した銅版画が既にあり、１９世紀半ば、幕末には写真や石版画の技術が伝えられるなど、複製技術の様々な技法が日本において花開いた時期と言え、日本版画史の中でも最も充実した時代と言える。また版画を、広い意味での複製芸術としてとらえると、芸術作品としてのみならず、大量頒布が可能な技術であるが故に、新聞や雑誌などの媒体にも用いられ、挿絵やあるいは広告として産業にも寄与していくこととなった。これは、手作業での版画制作から機械を用いた大量生産へという、美術を超えた社会の動きとも連動している。本研究の具体的な目的としては、１９世紀初頭からの版画作品を網羅すべく作家の伝記調査と作品調査を行い、それぞれの版画技術が相互に与えた影響関係について考察し、明らかに

していくことがある。また、新聞や雑誌という媒体で挿絵あるいは口絵などを担当した作家たちについては、これまでにまとまった研究が存在しないことから、事跡と作品の詳細な調査を行い、資料化を行うことを目的とした。

３．研究の方法

前項にも記したように、木版画を中心とした当該時期の複製媒体について、作家、作品、そして発表媒体の詳細な調査を行い、これらを資料化した。また、個々の調査結果については、資料を掲載した論文として、発表を行った。

以下、研究方法についての具体的な事柄を述べる。

本研究でテーマとする１９世紀版画(とりわけ１９世紀後半の木版画)については、図柄を特定できる視覚資料(図録など)が一般に乏しく、対象とする版画作品もしくは新聞、雑誌等に掲載された作品のカラー図録の刊行およびデータベースの作成が急務となっている。作品の撮影には近年の美術史学における画像資料構築の趨勢に従い、従来からの３５ミリリバーサルフィルムによる撮影と、高精度（１２００万画素クラス）デジタル一眼レフカメラによるデジタル撮影を併用し、データ保存の永続性と使用の簡便性の両面を追求した。また、これまですでに調査済みの作例（葛飾北斎、歌川広重、歌川国芳、月岡芳年、小林清親等の木版画作品と「やまと新聞」などの新聞紙面）については、スライドスキャナを用いて高解像度デジタルデータ化を順次進行した。これらを作品の詳細データと共にデータベース化し、当該分野の基礎資料として公開する予定であるが、それは本研究計画終了後である今年度（2011 年度）の課題として持ち越されることとなった。

作品調査については、版画という性格上複数枚存在し、摺りの良し悪しも懸念されるところではあるが、原則として国内機関に所蔵されている作品とする。また申請者が所属する京都造形芸術大学には、１８００点にも及ぶ明治版画の貴重なコレクション(大江直吉コレクション；科学研究費の助成を受け、データベースを制作済み)がある。またこれに加え、新たに寄贈を受けた１００点を越える当該時期の版画作品がある。私は大江コレクションのデータベース制作に美術史の側面から協力をしてきたが、新たに寄贈を受けた作品については、最初に作品調査を行い、所属大学所蔵作品のデータ公開に寄与する事とした。なお本研究にとって重要で、かつ調査の必要性が強く感じられる作品に限っては、海外調査を行うこととしていたが、これは機関での業務遂行上、諦めざるをえなかった。

文献史料からの検討は、公刊されている江戸期、明治期の日記類、随筆類、新聞などから関連する記事の抽出収集を行った。また『新小説』や『風俗画報』などの雑誌、「東京日日新聞」や「やまと新聞」など新聞の挿絵、口絵に加えて付録類、関連記事の精査もあわせて行い、全体像を明らかにした。

４．研究成果

１９世紀の複製媒体すべてを視野に入れた研究ではあるが、やはり自らの研究土台となる木版画という媒体を主軸に据えて、それとの比較において他の媒体について検討する視線へとシフトしていくこととなった。これは、１９世紀の木版画という媒体自体についての研究が、未だ層が浅いためである。とは言え、幕末から明治初年における木版画の調査結果は充実したものとなった。

一方、とりわけ明治期に入ってからの木版画は他の複製媒体との関係が深く、また単に一枚刷りの製品としての版画としてだけでなく、その進出範囲は幅広いものとなっている。

研究初年度にあたる 2007 年度にはまず、これまでの木版画研究をまとめた学位申請論文「十九世紀日本版画における風景主題と歴史主題」を提出、翌 2008 年 7 月に学位を取得した。同年には、学位論文の一章でもあった小林清親における歌川広重受容についても、学内研究紀要に発表した。

翌 2008 年度には、修士論文をまとめるための研究から長年に渡って調査などをすすめてきた、月岡芳年についてまとめた論文を発表することができた。これは『激動期の美術』（ぺりかん社）の中に収められ、公刊することができた。併せて芳年については、その画業において最も注目されてきた、一連の「血みどろ絵」について、初めて研究者の立場からこれをまとめ、学内の研究紀要に発表した。また同時にこの年は、江戸期の木版画として常に一定の注目を集めながら、しかしながら研究の俎上にはあがっていなかった「春画」についても、葛飾北斎の諸作品を中心にまとめることができた。

2009 年度には、07 年度に提出をした学位論文を基に、これを加筆修正し、単行書『浮世絵版画の１９世紀』として公刊した。また、この書籍にまとめるにあたって、学位論文提出後に新たに研究の進捗をみた、歌川広重と「木曽海道六拾九次」に関する口頭発表を、美術史学会西支部零回にて行う事ができた。この発表内容を、前述の単行書に反映させている。

最終年度にあたる 2010 年度には、木版画との関係を踏まえた他の複製媒体に着目し、

モティーフの共通性について述べた研究論文を発表した。版画の技術が成しえたこと、そして共通するモティーフを選ばざるを得なかった時代背景についても言及を行い、様々な版画技法とその関係性について、いささかの知見を述べることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①菅原真弓「技術とモティーフ―明治初年の主に版画における風景表現をめぐって」『GENESIS』(京都造形芸術大学紀要）１４号、2010 年 9 月、査読有り、pp134～150)
②菅原真弓「「縦絵」の時代―歌川広重と縦構図の風景画について」『GENESIS』（京都造形芸術大学紀要）１３号、2009 年 9 月、査読有り、pp101～128)
③菅原真弓「「血みどろ絵」考」『GENESIS』(京都造形芸術大学紀要）１２号、2008 年 9 月、査読有り、pp. 73～89
④菅原真弓「描かれた『道中膝栗毛』」『「東海道中膝栗毛」の世界』展図録、2008 年 6 月、査読無し、pp. 12～20
⑤菅原真弓「小林清親の光と広重受容」『GENESIS』(京都造形芸術大学紀要）１１号、2007 年 9 月、査読有り、pp73～89

〔学会発表〕（計２件）
①菅原真弓「歌川広重と木曽街道の旅」美術史学会西支部例会（於・大阪市立東洋陶磁美術館)、2009 年 11 月
②菅原真弓「小林清親の広重受容」第６０回美術史学会全国大会（於・九州大学)、2007 年 5 月

〔図書〕（計５件）
①菅原真弓（町田市立国際版画美術館編)『謎解き浮世絵叢書　月岡芳年　和漢百物語』二玄社、2011 年 7 月刊行予定（校了)、総頁数未定
②中江克己、室伏哲郎、菅原真弓『大江戸「春画」入門』宝島社（宝島文庫)、2010 年 3 月、担当頁数 36
辻惟雄、安村敏信、山梨絵美子、児島薫、横
③菅原真弓『浮世絵版画の十九世紀―風景の時間、歴史の空間』ブリュッケ、2009 年 11 月、総頁数 362
④横田洋一、塩谷純、小栗祐美、田島達也、菅原真弓『激動期の美術―幕末・明治の画家たち〔続〕』ぺりかん社、2008 年 10 月、担当頁数 36
⑤室伏哲郎、酒井雁高、菅原真弓『別冊宝島春画』宝島社、2008 年 6 月、担当頁数 24

６．研究組織
(1)研究代表者
菅原真弓（SUGAWARA MAYUMI）
京都造形芸術大学・芸術学部・准教授
研究者番号：10449556

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし